

経理課所蔵資料「収納簿」から見た立教大学学生・生徒の 在籍者数推計（一）…一九二三年度より一九三〇年度まで

宮川 英一

はじめに

本稿の目的は、立教大学財務部経理課が所蔵する資料「収納簿」⁽¹⁾の概要を紹介し、この資料をもとに在籍者数を推計することにある。「収納簿」は学生から納付される学費を管理するための文書であり、年度ごとに作成され、経理担当部署に保存されてきた。二〇二〇年三月に、立教学院史資料センターは一五〇年史編纂のため本資料を当該部署の保存倉庫で目にする機会を得た。その歴史的資料としての重要性に鑑みて、立教学院史資料センターは当該資料を借り出して保存措置を実施し、資料の記載内容を検討した。本稿はその中間報告である。

旧制の立教大学の在籍者数は従来、『文部省年報』⁽²⁾を

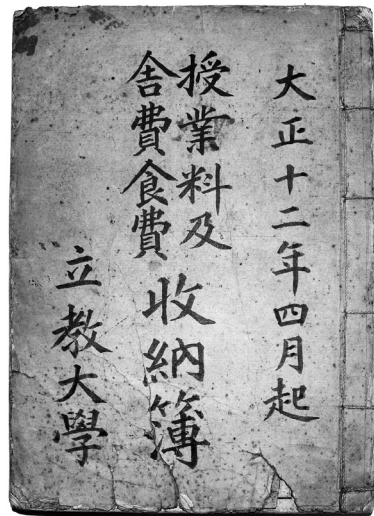
利用した推計値が用いられてきた。『立教学院百年史』やそれをもとにした『立教大学の歴史』が主な研究成果として挙げられる⁽³⁾。また、在籍者数とは異なるが、学部卒業生数（一九〇七年度から一九四八年度まで）、学科修了者数（同期間）および立教工業理科専門学校の卒業生数（一九四四年度から一九四九年度まで）については、『一九九八年度教務部学務課学務関係事務統計資料』をもとにした推計値が『立教学院百二十五年史』資料編第三巻に収録されている⁽⁴⁾。

以下ではまず、「収納簿」の概要を紹介し、ついで在籍者数推計のための資料操作について述べたい。次に一九二三年度から一九三〇年度までに限定⁽⁵⁾されるが「収納簿」から集計した立教大学の在籍者数推計を提示し、

『文部省年報』記載数値との比較を試みてその差異に言及する。最後に、「収納簿」にみられる退学や除名など事由別の在籍者数推計と「外国人姓名(定義は後述)の年度別・所屬別の推計を示したい。

(二) 資料概要

今回、その所在が確認された財務部経理課所蔵資料「収納簿」の資料点数は六三点である。資料は線装されているものと、資料に綴じ穴が二つ開けられ、単に紐で綴られてるものに分かれ、多くが後者の仕様で保存されている。資料の作成年は、推定で旧制の立教大学が成立した一九二二年の翌年にあたる、一九二三年度から新制大学成立から四年後にあたる一九五三年度までである。今回、立教学院史資料センターが確認した資料の一覧は、表一の通りである。一九二三年度の資料表紙には「大正十二年四月起 授業料及舎費食費収納簿」とある通り、本資料には末尾に宿舎利用者名簿が記載されており(図一参照)、この資料が当時、大学の授業料のほかにも宿舎費用の収納簿としても利用されていたことが分かる。なお、昭和四(一九二九)年度から資料名が「授業料収納簿」に変更するが、宿舎費用の収納に関する記録は昭和五(一九三〇)年度分の資料まで記載が確認できる。また、昭和七(一九三二)年度までの資料には、一



図一 「収納簿」表紙(1923年度)

冊のなかに学部と予科のどちらの情報も記載されていたが、翌年からは別々の簿冊にまとめられている。とりわけ、戦時下や旧制大学から新制大学への移行期には、学部については一年度一冊の文書単位ではなく、複数冊にわたる構成の存在が確認できる。

「収納簿」の収録項目について言及してみよう。当該時期に立教諸学校を構成していたのは、立教中学校を除いて、旧制の立教大学学部生(選科生を含む⁶⁾)、予科生、大学院生(研究科生)および立教工業理科専門学校(生徒と多岐にわたるが、各年度の「収納簿」には、大学(ないしは専門学校)の学部(学科)および学年ごとに、所属する学生・生徒の姓名を記入する欄(以下、姓

表一 立教大学経理課所蔵「収納簿」一覧

No	資料名	No	資料名
01	大正十二年四月起 授業料及含費食費収納簿	33	(昭和廿五年度 収納簿 (一・二年))
02	大正十三年度 授業料及含費食費収納簿	34	昭和廿五年度 収納簿 (三・四年)
03	大正十四年度 授業料及含費食費収納簿	35	昭和廿六年度 収納簿 (一・二年)
04	大正十五年度 授業料及含費食費収納簿	36	昭和廿六年度 収納簿 (三・四年)
05	昭和二年度 授業料及含費食費収納簿	37	昭和廿七年度 収納簿 (一・二年)
06	昭和三年度 授業料及含費食費収納簿	38	昭和廿七年度 収納簿 (三・四年)
07	昭和四年度 授業料収納簿	39	昭和廿八年度 収納簿 (一・二年)
08	昭和五年度 授業料収納簿	40	昭和廿八年度 収納簿 (三・四年)
09	昭和六年度 授業料収納簿	41	昭和八年度 収納簿 豫科
10	昭和七年度 収納簿	42	昭和九年度 収納簿 豫科
11	昭和八年度 収納簿 学部	43	昭和十年度 収納簿 豫科
12	昭和九年度 収納簿 学部	44	昭和十一年度 収納簿 豫科
13	昭和十年度 収納簿 学部	45	昭和十二年度 収納簿 豫科
14	昭和十一年度三月卒 収納簿 学部	46	昭和十三年度 収納簿 豫科
15	昭和十二年度 収納簿 学部	47	昭和十四年度 収納簿 豫科
16	昭和十三年度 収納簿 学部	48	昭和十五年度 収納簿 (豫科)
17	昭和十四年度 収納簿 学部	49	昭和十六年度 収納簿 (豫科)
18	昭和十五年度 収納簿 (学部)	50	昭和十七年度 収納簿 (豫科)
19	昭和十六年度 収納簿 (学部)	51	昭和十八年度 収納簿 (豫科)
20	昭和十七年度 収納簿 (学部)	52	昭和十九年度 収納簿 (豫科)
21	昭和十七年十月 収納簿 (学部)	53	昭和二十一年度四月 収納簿 (豫科)
22	昭和十八年十月 収納簿 (学部)	54	昭和二十二年度 収納簿 豫科
23	昭和拾九年拾月 収納簿 学部	55	昭和二十三年度 収納簿 (豫科)
24	昭和二十年四月 収納簿 (学部)	56	昭和十九年度 収納簿 [理科専]
25	昭和二十年四月 収納簿 [予科]	57	昭和二十年四月 収納簿 [理科専]
26	昭和二十年十月 収納簿 (学部)	58	昭和二十一年度 収納簿 [理科専]
27	昭和廿一年四月 収納簿 (学部)	59	昭和二十二年度 収納簿 [理科専]
28	昭和廿一年十月 収納簿 (旧学三)	60	昭和二十三年度 収納簿 [理科専]
29	昭和二十二年度 収納簿	61	昭和廿六年度四月 収納簿 大学院
30	昭和二十三年度 収納簿 (学部)	62	昭和廿七年度四月 収納簿 大学院
31	昭和廿四年度 収納簿 (一・二年)	63	昭和廿八年度四月 収納簿 大学院
32	昭和廿四年度 収納簿 (旧制)		

名欄)と夏季休暇にあたる八月を除いた毎月の学費納入状況が記載された欄(以下、学費納入欄)が設けられている。記載者は学部・学科別および学科別(学科の記載は一九三一年度以降)にまとめられ、昭和五年(一九三〇)年度までの資料には、一部の例外を除いているは順に記載され、それ以後のものには五音順に記載されている。学費納入の有無は、専用の受領印による印影の有無か、筆かペンによる記号や日付の記入により弁別できる。学費納入の遅延、退学や除名など学費未納に関する事由については、学費納入欄に書き込みが見られるが、全ての事例について記載があるわけではない。単に記載姓名に朱で取消線を付し、日付とともに「休学」、「応集」、「退学」、「除名」、「転科」などだけ記載がある場合や、ただ姓名に取消線が付されている場合も多くみられる。

このように本資料は、姓名欄と学費納入欄の二項目で構成されており、それら以外の学生・生徒の基本情報である姓名のふりがな、年齢、出身学校、戸籍や保証人名などは記載されていない。ただし、欄外に関連情報の書き込み⁷⁾がみられ、挟み込まれた資料や貼付された紙片⁸⁾もいくつか確認できる。記載情報には前述のような限界はあるが、この学内資料を用いて在籍者推計を試みるのは一定の意義があると考えられる。次項では「収納簿」を利

用した⁹⁾在籍者数推計の資料操作方法について述べていきたい。

(二) 集計処理の方法

「収納簿」から在籍者を推計するために本稿では、年度、所属学部・学科、学年、姓名、学費完納の有無、資料記載者の「在籍者」・「非在籍者」の弁別、学費を完納していない場合の事由、「外国人姓名」か否かの判別、その他の書き込み事項をデータとして抽出した。これらに加えて、重複レコードを抽出するため、姓名の読み仮名を推定してデータベースに入力した。

「在籍者」・「非在籍者」の区分について言及すると、本資料のなかで年度末分までの学費の納付が確認できた者は学費完納者とみなし、これに休学者と、特待生などの学費納付免除者などを加えたケースを本稿では「在籍者」と区分し、年度末まで学費納付の完納がみられなかったケースを「非在籍者」と区分した。加えて、単に資料に記載されているケースを「記載者」とした。記載者は在籍者・非在籍者を内包する区分である。なお、在籍者区分については、事由の記載がなく、年度末まで学費を完納した場合には、「なし」のほか、「休学」と「在学その他」の三つの下位区分を設定し、コーディングした。「なし」は学費を年度末分まで納付した者で特に休

学などの事由記載がないケースを指し、「休学」は、学費納入欄に「休学」記載があり、復学していないケースを分類した。「在学その他」は、休学後復学したケースや、九月入学など年度中途より入学しないしは復学したケースなど、全期間の納付印が認められないものを分類した。なおこの下位分類には、事由は示されていないが姓名に取消線がなく、在籍していると見なせる者を含めた。次に非在籍者区分について述べると、同区分には、「退学」、「除名」、「除籍」、「死亡」、「不詳その他」の五つの下位区分を設定しコーディングしたが、資料に休学、退学、除名、除籍、死亡といった文言が確認できた場合にだけ「退学」、「除名」、「除籍」、「死亡」区分を採用した。「不詳その他」には、事由が明示されていないが、姓名が取り消されているケースをここに分類した。この「不詳その他」に分類された事例には、一定期間にわたって学費納付の押印が見られるケースもある。なお、後述するように、「不詳その他」に区分されるケースが多く見られる年度がある。

「外国人姓名」の弁別方法について言及すると、本資料には記載者の戸籍の記載がないため確実な弁別方法ではないが、資料に記載される姓名のうち、漢字圏出身の一文字姓と判別できる者(分ち書きによる姓名の記載や朝鮮・中国で使用される人名漢字を判断基準にした)、

もしくは姓名がカタカナ表記の者を「外国人姓名」と見なし、それを他の姓名と区別して抽出した。

在籍者数・非在籍者数と資料記載者数の集計にあたってはなお、重複や誤記は除去した。そのため、資料に記載された件数(資料内で記入のある列の総数)と記載者数とは一致しない。本稿が今回処理した、一九二三年度から一九三〇年度の八分冊分のレコード数は八六二〇件であり、このレコード数が資料に記入された実際の件数に近似する⁹⁾。

一九二三年度から一九三〇年度までの 立教大学在籍者数推計

ここからは「収納簿」から抽出したデータの集計値より、当該年度の立教大学の在籍者数を概観していきたい。まず八年間分の推計値の全体的な傾向について述べる。そこで一九二七年度の予科第三学年の新設による影響を指摘する。ついで、『文部省年報』記載の数値との差異について言及する。

(三) 推計値の概観

ここでは本稿で推計を試みた一九二三年度から一九三〇年度までの立教大学在籍者数の概観をみていきたい。

当該各年度の基礎集計表は、本稿末尾に八点の付表（表一〇）として掲載したので併せて参照されたい。

まず「収納簿」に記載された学生数の全体的な傾向をみていきたい。年度別の記載者から、在籍者数と非在籍者数の内訳とその比率を算出したのが表二である。研究者、学部学生、選科生および予科生徒の各値を足し合わせた在籍者数（表二（A））は年を追うごとに増加傾向にあり、一千人を超えるのは一九二八年度からである。次に、記載者数に対する非在籍者数の比率（同表（B）／（C））をみると、一九二八年度だけが二割以上を占めており、同年度を頂点に前後の年度でその比率が高いことが確認できる。実数の推移をみると（同表（B））、非在籍者数は一九二九年度と一九三〇年度はともに百人台に低減している。一九二七年度から一九二九年度にかけて見られる、在籍者数の大きな変動の要因は、一九二七年度より予科文科、予科商科ともに第三学年が新設され、予科定員数は三〇〇人から四五〇人に増員されたことにある（一九二八年度には定員数が六〇〇人に変更された）。それを確かめるために、表三の年度別学部別学年別在籍者数推計を確認したい。一九二三年度から一九三〇年度までの予科の学部別在籍者数推計は、これまでの研究で示されてこなかった値である。同表の予科の推計数に注目すると、一九二六年度の予科の文科生徒数と商科生

徒数の合計は三二四人であるが、翌年度の一九二七年度には合計で三七八名に増加し、一九二八年度には早くも定員を超えた六七五人の在籍者数が確認できる。

次に予科の年度別の内訳数を進級者数の推移とともにみていきたい。「収納簿」の姓名の記載を前年度の記載と対照すると、予科第三学年が新設された初年度にあたる一九二七年度には、一九二六年度に予科第一学年に在籍した生徒は予科第三学年に進級し、同様に予科第二学年に在籍した生徒は学部第一学年に進級したことが確認できる。このため、一九二七年度は、予科第一学年にとどまらず、同第二学年も新規入学者を中心に構成されたことが確認できる。同様に一九二八年度も予科第一学年と第二学年には新規入学者や転科生が確認できる。たとえば、一九二七年度の予科文科第一学年の生徒数は二十七人であるが、多くの生徒が上級学年に進級を経たと推測される翌年度の予科文科第二学年の生徒数は五三人を数える。このうち、三〇名の姓名が前年度の「収納簿」に記載がないため、新規入学者であると推測される。同様の事例は、一九二七年度の予科商科第一学年の生徒数（九四人）と翌年度の予科商科第二学年の生徒数（一六三人）を比較する場合（推定される新規入学者数は八五人）や、一九二八年度の予科商科第一学年の生徒数（一八四人）と翌年度の商科第二学年の生徒数（一九七人）

表二 年度別在籍者数と非在籍者数推計

(単位：人，%)

年度	(A) 在籍者数	在籍者数比率 (A/C)	(B) 非在籍者	非在籍者数比率 (B/C)	(C) 記載学生数 (A+B)
1923	584	85.6	98	14.4	682
1924	680	91.6	62	8.4	742
1925	666	86.8	101	13.2	767
1926	723	91.6	66	8.4	789
1927	882	82.4	189	17.6	1071
1928	1080	78.1	303	21.9	1383
1929	1230	87.4	177	12.7	1407
1930	1311	89.2	159	10.8	1470

出典：付表一〇(一)～(八)より作成。

注：1) 各年度の値は学部学生数と予科生徒数の合計で選科学生を含む。

2) 各年度の資料には誤記や重複が見られるが、それは除外した。

3) (A) 項の在籍者数は各年度末の学費完納者数に休学者数などを加えた人数を示す。

4) (B) 項の非在籍者数は資料記載者のうち、退学、除名などの事由により年度末まで納付実績がない者の人数を示す。事由詳細と内訳については表六参照。

5) (C) 項の記載学生数は在籍者数と非在籍者数の合計値で、資料に見られる人数を指す。ただし、重複や誤記は除いた。

表三 年度別学部学科別学年別在籍者数推計

(単位：人)

年度	学科 学年	研究科	文学部本科				商学部本科				本科計
			1	2	3	小計	1	2	3	小計	
1923			25	22	6	53	92	91	52	235	288
1924			20	24	24	68	110	89	95	294	362
1925		6	40	16	25	81	110	107	81	298	379
1926		7	37	34	17	88	90	108	106	304	392
1927		5	22	33	32	87	103	87	106	296	383
1928		6	34	22	34	90	124	97	88	309	399
1929		2	42	29	24	95	135	120	95	350	445
1930		4	46	37	30	113	151	127	118	396	509

年度	学科 学年	予科文科				予科商科				予科計	合計
		1	2	3	小計	1	2	3	小計		
1923		35	20		55	128	113		241	296	584
1924		38	39		77	118	123		241	318	680
1925		28	32		60	128	93		221	281	666
1926		50	24		74	135	115		250	324	723
1927		27	46	34	107	94	162	131	387	494	882
1928		94	53	39	186	184	163	142	489	675	1080
1929		89	91	47	227	206	197	153	556	783	1230
1930		89	70	70	229	162	199	208	569	798	1311

典拠：付表一〇(一)～(八)より作成。

注：「選科」学生は本科に含む。1923～1926年度の予科第3学年の空欄は、1927年度より予科第3学年が新設されることから該当者がいないためである。1923～1924年度の研究科欄も空欄だが、史料に当該頁がない。合計は研究科、本科、予科の在籍者数の総和を示す。

を比較する場合（推定される新規入学者数は三四人）にも当てはまる。これらの新規入学者による増加数が、前年度の在籍者数からの純増として当該年度の在籍者数推計に表れない（たとえば一九二八年度の予科商科第二学年の生徒数が純増の一七九人ではなく、一六三名にとどまる）のは、当然のことではあるが、当該年度に進級するまでの学生・生徒が退学や除名といった事由により進級しなかったことが影響している。この事由別の学生・生徒数の分布は後述する。

次に当該年度の立教大学在学者数の全体的傾向を『文部省年報』記載のデータと比較したい。表四は『文部省年報』各年度版をもとに立教大学の在学者数推計を示したものである¹⁰⁾。同表の数値は原史料に記載のある、「**「学生生徒」**」欄の数値を元に算出し、外国人についても足し合わせて表記した。なお、退学者および死亡者数はここに含めていない。比較作業を進めるため、「**「収納簿」**」による在籍者推計（前掲表三）と、『文部省年報』による在籍者推計（表四）との差異を示したものが表五である。表五の各値が正の場合には、「**「収納簿」**」による在籍者推計値が『文部省年報』記載数値より超過していることを示し、負の場合はその逆を示す。表五からまず両学部の本科在籍者数の比較を概観すると、一〇人以上の大きな差異が確認できるのは一九二三年度の商学部と一九二

九年度の文学部の値である。前者は、商学部在籍者数で四九名の差異が確認できるが、これは「**「収納簿」**」推計における同年度の商学部第三学年の数値である五二名と近似する。一九二三年度の『文部省年報』には、立教大学の商学部第三学年の在籍者数（大正十年二入学ノ者）は計上されていないことから、この差異が発生したと考えられる。つまり大正十年度入学者は、大学令による立教大学成立以前の入学者のため、『文部省年報』の当該欄より除外された可能性がある¹¹⁾。後者は一九二九年度の文学部の差異で、^{マイナス}▲一六人が確認できるが、当該年度の文学部第一学年が「**「収納簿」**」では四二人であるのに対し、『文部省年報』では五三人を計上している。文学部第一学年の差異は一人であり、この学年の数値だけで▲一六人という差異のすべては説明できないが、この差異が発生した原因の一つには、『文部省年報』の集計時期と、本「**「収納簿」**」推計の集計時期との違いによる影響が考えられる。『文部省年報』では当該年度の三月一日現在の数値を計上しているが、これとは異なり、本稿の「**「収納簿」**」推計では資料操作上の限界により、三月一日在籍者と同月末日在籍者とを弁別せずに在籍者数を計上した。当該年度の文学部第一学年には、学費を完納しなくても三月二日以後に退学したケースが一三人分確認できると、このケースの扱いの差異により推計値が異

表四 『文部省年報』による立教大学在籍者数推計（1923～1930年度）

年度	研究科			文学部				
	文学	商学	小計	宗教学科	哲学科	英文科	史学科	小計
1923				15	6	24		45
1924				18	7	35		60
1925	1	2	3	17	8	40	8	73
1926	5	3	8	13	12	41	11	77
1927	3	7	10	14	12	44	15	85
1928	2	3	5	18	9	47	12	86
1929	2	1	3	23	5	68	13	109
1930	1	2	3	24	6	55	27	112

年度	商学部			選科			予科	総計
	商学科	経済学科	小計	文学	商学	小計	大学予科	
1923	183		183	4	3	7	264	499
1924	160	130	290	8	3	11	284	645
1925	155	146	301	6	1	7	276	660
1926	160	146	306	8		8	283	682
1927	129	168	297	4	1	5	400	797
1928	134	174	308	3	1	4	564	967
1929	163	191	354	2		2	614	1082
1930	212	193	405	1		1	682	1203

典拠：『文部省年報』上巻、1923年度～1930年度。

注：1) 外国人数を含む。

2) 1923年度選科は文学部商学部の「生徒」表記の数値より算出した。

3) 空欄は記載なしを示す。なお、商学部経済学科の設置は1924年度、文学部史学科の設置は1925年度である。

表五 「収納簿」記載在籍者数と『文部省年報』記載数値との差異

(単位：人)

年度	研究科	文学部	商学部	予科	合計
1923	0	4	49	32	85
1924	0	0	1	34	35
1925	3	2	-4	5	6
1926	-1	3	-2	41	41
1927	-5	-2	-2	94	85
1928	1	1	0	111	113
1929	-1	-16	-4	169	148
1930	1	0	-9	116	108

典拠：表三、表四より作成。

注：1) 値が正の場合は『文部省年報』の数値に対して「収納簿」数値が超過していることを示す。

2) 表四の選科生の数値は各学部の学生数に繰り入れた。

なつたと考えられる。

さて、学部生よりも推計値の差異が顕著なのが予科生徒の推計値である。一九二三年度から一九三〇年度までのいずれの年度でも「収納簿」記載の在籍者数が『文部省年報』記載の数値を超過している。とりわけ、予科第三学年の新設時にあたる一九二七年度には九四人の超過を示しており、その後三年間は一〇〇人を超えた差異を維持している。この差異が生じた理由を本稿では他の学内資料に基づいて説明することはできないが、予科在学者数が定員（一九二六年度までが四〇〇名、一九二七年度に四五〇人、一九二八年度以降が六〇〇名）よりも超過していた事実は、一九二九年度と一九三〇年度の『文部省年報』記載数値（表四参照）のほか、一九三〇年の公文書において、予科定員が六〇〇人であるのに対して現在数が六五〇人を予定していたことから確認できる¹²⁾。「収納簿」を用いた在籍者推計からは、立教大学予科における在籍者数（各年度末在籍者数）は『文部省年報』の数値（各年度三月一日現在）を上回っており、予科定員数の超過は予科第三学年の設立の翌年より現れていたことが分かる。

（四）事由別記載者数推計

ここではまず、「収納簿」に見られる退学や除名など

の事由を整理し、次に学年別事由別の在籍者数を示したい。本稿で取り扱った「収納簿」に見られる事由は、資料概要で触れたとおり必ずしも標準化された記述ではない。退学や除名などの事由について、例を挙げると、「昭和二年二月廿一日退学」（一九二六年度文学部本科一年生）、「春季登校セサルニ由り昭和二年一月廿日除名」（同予科文科二年生）、「除籍（無由ナレドモ復学ノ見込ミナシ）、昭和参年式月廿日 除名」（一九二七年度商学部本科一年生）、「昭和三年十月十二日付退学（ロクマク炎ノ為）」（同予科商科一年生）、「除名 学則二十三条二抛り 昭和二年十月廿四日（同予科商科三年生）」といった記述が見られる。この最後の事例にみられる「学則二十三条」とは、立教大学の「学則」第二十三条の除名規定を指している¹³⁾。なお、退学については除名と同様に、学則で規定があるが（学則第二十二条）、除籍については学則上に規定は見当たらない。しかしながら、「収納簿」上では除名も除籍もそれぞれ違い分けがみられるので、本推計ではこれを別々に分類して集計した。

上述したように、標準化されていない事由を「（二）集計処理の方法」の項目で前述した事由分類をもとにコーディングして、年度別に学生数の推計値を集計したものが表六である。同表のうち、在籍者小計および非在籍者小計の各推計値は概観部分で前述した通り、一九二

表六 年度別事由別推計者数

(単位：人、%)

年度	事由別記載者内訳										記載者合計 (在学者小計+非在学者小計)
	事由別在籍者内訳				事由別記載者内訳						
	なし	休学	在学その他	在学者小計	退学	除名	除籍	死亡	不詳その他	非在籍者小計	
1923	553	21	10	584	28	55	0	3	12	98	682
	81.1	3.1	1.5	85.6	4.1	8.1	0.0	0.4	1.8	14.4	100.0
1924	632	17	31	680	25	7	8	6	16	62	742
	85.2	2.3	4.2	91.6	3.4	0.9	1.1	0.8	2.2	8.4	100.0
1925	635	14	17	666	36	31	1	4	29	101	767
	82.8	1.8	2.2	86.8	4.7	4.0	0.1	0.5	3.8	13.2	100.0
1926	689	20	14	723	23	24	1	5	13	66	789
	87.3	2.5	1.8	91.6	2.9	3.0	0.1	0.6	1.6	8.4	100.0
1927	832	33	17	882	62	40	4	4	79	189	1071
	77.7	3.1	1.6	82.4	5.8	3.7	0.4	0.4	7.4	17.6	100.0
1928	1050	25	5	1080	66	62	27	5	143	303	1383
	75.9	1.8	0.4	78.1	4.8	4.5	2.0	0.4	10.3	21.9	100.0
1929	1181	47	2	1230	81	34	41	5	16	177	1407
	83.8	3.3	0.1	87.3	5.9	2.4	2.9	0.4	1.1	12.7	100.0
1930	1250	55	6	1311	71	28	26	4	30	159	1470
	85.0	3.7	0.4	89.2	4.8	1.9	1.8	0.3	2.0	10.8	100.0

出典：付表一〇(一)～(八)より作成。

注：上段は推計者数実数、下段は記載者合計に対する構成比率(小数点第2位以下切り捨て)。

八年度を頂点に前後の年度で記載者数に対する非在籍者数の割合が高い。どの事由が非在学者数の数値を押し上げる要因になっているのかを確認するため、一九二八年度の事由別の内訳を見てみると、退学(六六人)や除名(六二人)とともに不詳その他(一四三人)が事由として突出していることが分かる。この傾向は一九二七年度の事由別の分布でも同様にみられる。

さて、一九二八年度で「不詳その他」に区分されたケースを、後掲の付表一〇(六)より所属学部と学年に分けて検討すると、予科商科一年生の四六人、同二年生の四四人、予科文科一年生の三六人、同二年生の一五人がこのケースに該当することが確認できる。これら当該年度の予科を中心とした、「不詳その他」に分類される四ケースの合計は一四一名であり、同年の「不詳その他」の合計値のほぼ全てを占める。これらのケースに限って「収納簿」上の記載内容について詳述すると、その多くが「収納簿」上では姓名が記載されているが取消線を付され、四月分から学費の納付印や納付日時の記載が認められない。姓名の記載が単なる誤記とは考えにくいことから、これらの記載内容は当時、入学予定者の姓名が「収納簿」

に記載されたのち、実際には立教大学予科に就学せず、四月分からの授業料の納付もおこなわなかったために生じたと推測される。つまり、予科第一学年、同第二学年で多くみられたこの「不詳その他」のケースは予科入試や入試合格者の学校選択との関連が示唆されるが、その詳細は不明である。

また、研究科、本科、予科の所属別に区分した年度別の非在籍者数をみると表七の通りである。一九二七年度以降、予科第三学年の新設により予科生徒数が学部本科学生数を大きく上回るようになったため、予科生徒の非在籍者数も当然、年度を追う毎に増大する傾向にある。非在籍者数における本科と予科の比率を単純に比較することはできないが、表七にある通り、非在籍者数全体に対する予科の非在籍者数の割合は、すべての年度で六割以上を占め、とりわけ、予科第三学年の新設時にあたる一九二七年度とその翌年は八割を超えていた。

以上の「収納簿」にみえる事由別、所属別の非在籍者数の傾向をまとめると、一九二三年度から一九三〇年度までの立教大学における非在籍者数は、予科生徒が高い割合を占めていると概括でき、その流動性の高さは、とりわけ、予科第三学年の新設時から顕著になったと指摘できる。

表七 年度別所属別非在籍者数

(単位：人、%)

年度	研究科	比率	本科	比率	予科	比率	合計	比率
1923			25	25.5	73	74.5	98	100.0
1924			13	21.0	49	79.0	62	100.0
1925	0	0.0	26	25.7	75	74.3	101	100.0
1926	0	0.0	21	31.8	45	68.2	66	100.0
1927	4	2.1	26	13.8	159	84.1	189	100.0
1928	4	1.3	28	9.2	271	89.4	303	100.0
1929	0	0.0	47	26.6	130	73.4	177	100.0
1930	0	0.0	48	30.2	111	69.8	159	100.0

出典：付表一〇（一）～（八）より作成。

注：1923年度と1924年度の研究科は原資料に該当なし。

(五) 「外国人姓名」在籍者数推計

本項では当該時期の立教大学における「外国人姓名」の在籍者数推計を概観したい。「外国人姓名」の定義については、(一)で言及した通りである。まず、一九二三年度から一九三〇年度までの「外国人姓名」の在籍者数と非在籍者数の全体的な分布をみると、表八の通りである。一九二三年度から一九三〇年度まで一貫して、「外国人姓名」の在籍者数(表八(A))は二〇人台以上を示し、最高値は一九二七年度と一九二八年度の四二人である。退学者や除名者を計上した非在籍者も一定数存在し、とりわけ一九二三年度の関東大震災時の一九名が最高値である。在籍者数と非在籍者数を足し合わせた「収納簿」記載者数は三〇人台から五〇人台までで推移しており、当該時期の立教大学における「外国人姓名」の学生・生徒数は、一定の規模を保っていたことが確認できる。

次に、当該時期の立教大学における「外国人姓名」の在籍者と記載者を、年度別・学部学科別・学年別の分布をみてみると、表九(一)と表九(二)の通りである。「外国人姓名」の在籍者数の学部本科および予科の内訳を確認すると、一九二三年度と一九二四年度は学部本科学生数が予科生徒数を上回っているが、一九二五年度以降はそれが逆転している。これは同時期における立教大

表八 年度別「外国人姓名」の在籍者数・非在籍者数推計と『文部省年報』記載外国人在籍者数

(単位：人)

年度	(A) 在籍者数	(B) 非在籍者	(C) 記載学生数 (A+B)	(D) 文部省年報
1923	26	19	45	6
1924	32	1	33	6
1925	33	1	34	6
1926	37	8	45	8
1927	42	12	54	6
1928	42	17	59	2
1929	36	14	50	2
1930	41	12	53	2

出典：立教大学「収納簿」(1923年度～1930年度) および『文部省年報』(1923年度～1930年度)より作成。

注：1) 「外国人姓名」とは資料に記載される姓名のうち、漢字圏出身の1字姓と判別できる者もしくは姓名がカタカナ表記の者の集計値を示す。

2) (D) の文部省年報は、同年報記載の外国人在籍者数を示す。

表九（一）年度別学部学科別学年別立教大学「外国人姓名」在籍者数推計
(単位：人)

年度	学科・学年	研究科	文学部本科				商学部本科				本科計
			1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計	
1923			4	3	0	7	3	0	1	4	11
1924			2	6	2	10	3	3	0	6	16
1925	1		7	2	6	15	3	3	3	9	24
1926	5		8	6	2	16	0	3	3	6	22
1927	3		2	6	6	14	1	1	3	5	19
1928	1		3	2	5	10	3	1	1	5	15
1929	0		1	2	1	4	4	2	1	7	11
1930	1		0	1	2	3	5	2	2	9	12

年度	学科・学年	予科文科				予科商科				予科計	合計
		1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計		
1923		8	3		11	2	2		4	15	26
1924		2	9		11	2	3		5	16	32
1925		2	5		7	1	0		1	8	33
1926		6	1		7	2	1		3	10	37
1927		0	5	4	9	3	7	1	11	20	42
1928		8	1	4	13	1	6	6	13	26	42
1929		5	4	1	10	6	2	7	15	25	36
1930		7	5	3	15	2	7	4	13	28	41

出典：立教大学「収納簿」（1923年度～1930年度）より作成。

注：選科は本科に含む。

表九（二）年度別学部学科別学年別立教大学「外国人姓名」記載者数集計
(単位：人)

年度	学科・学年	研究科	文学部本科				商学部本科				本科計
			1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計	
1923			4	3	0	7	5	0	1	6	13
1924			2	6	2	10	3	3	0	6	16
1925	1		8	2	6	16	3	3	3	9	25
1926	5		10	6	2	18	0	4	3	7	25
1927	4		3	8	7	18	1	1	3	5	23
1928	2		6	5	5	16	3	1	1	5	21
1929	0		4	3	1	8	7	3	1	11	19
1930	1		1	3	3	7	6	3	2	11	18

年度	学科・学年	予科文科				予科商科				予科計	合計
		1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計		
1923		12	9		21	6	5		11	32	45
1924		2	9		11	3	3		6	17	33
1925		2	5		7	1	0		1	8	34
1926		9	2		11	3	1		4	15	45
1927		3	6	5	14	4	8	1	13	27	54
1928		13	4	4	21	3	6	6	15	36	59
1929		9	6	1	16	6	2	7	15	31	50
1930		9	8	3	20	2	8	4	14	34	53

出典：立教大学「収納簿」（1923年度～1930年度）より作成。

注：選科は本科に含む。

学在籍者数全体の傾向と同じであり、予科生徒数の全体の規模が拡大するにしたがって、「外国人姓名」の在籍者数も拡大していったと推定される。なお、表九(一)の記載者数の分布でも同様の傾向を指摘することができる。表九(一)の分布で興味深い点は、「外国人姓名」の研究科生の在籍者数である。前掲表三の立教大学全体における研究科の在籍者数と表九(一)記載の「外国人姓名」の研究科在籍者数とを比較すると、「外国人姓名」の在籍者が研究科在籍者数の半数以上を占める年度があることが分かる(一九二六年度と一九二七年度)。研究科在籍者数は当該年度間でいづれも一〇名に満たないが、「外国人姓名」の学生が立教大学研究科においても一定の規模を持っていたことが確認できる。

最後に「外国人姓名」の出身地について考察したい。前述したとおり、「収納簿」には戸籍の記載はなく、この資料だけでは「外国人姓名」の学生・生徒の出身地域を推定できない。しかしながら、「収納簿」記載の「外国人姓名」の在籍者数の推計値(表八(A))と『文部省年報』記載の外国人在籍者数(表八(D))とを比較すると、表八にあるとおり「収納簿」と『文部省年報』の外国人在籍者数に大きな乖離が見られることから、「収納簿」の「外国人姓名」推計値には日本の旧植民地出身者が含まれる一方で、『文部省年報』の外国人集計

値には日本国籍者である旧植民地出身者が含まれず、外国籍の学生・生徒だけを掲載していたと推定される。『文部省年報』にこの国籍上の弁別があったことを念頭に置くと、以下の推定が成立すると考えられる。つまり、『文部省年報』記載の外国人在籍者数は年度を追う毎に減少傾向を示す一方で、「収納簿」記載の「外国人姓名」の在籍者数は増加傾向を示しているため、「収納簿」にみられる立教大学の「外国人姓名」の在籍者は年度を重ねるたびに旧植民地出身者の割合が増加していったと推定される。

また、「収納簿」記載の「外国人姓名」のうち、カタカナ表記のケースは、一九二九年度と一九三〇年度にそれぞれ一件(一九二九年度に予科文科第二学年、一九三〇年度に予科第三学年に在籍した同一人物)だけ確認できた。そのため、『文部省年報』上の外国人在籍者数のほとんどが「収納簿」上の漢字表記の「外国人姓名」の学生・生徒に該当すると推定される。一方で、一九二三年度から一九三〇年度までに限定されるが、『文部省年報』にみられる立教大学の外国人学生・生徒は、漢字文化圏の出身者を中心とした留学生であった可能性が高いと考えられる¹⁴⁾。

むすびにかえて

本稿では立教大学財務部経理課が所蔵する「収納簿」の資料的特徴とその価値を紹介し、同資料を用いて一九二二年度から一九三〇年度までの立教大学在籍者数の推計を試みた。集計処理の方法や具体的な数値の再掲は割愛するが、本稿で言及した諸点を要約すると次の通りである。第一に、「収納簿」から推計した在籍者数は、『文部省年報』を用いた従来の推計とは異なり、より多くの学生・生徒が当時の立教大学に在籍していたことを示唆する結果となった。とりわけ、一九二七年度の予科第三学年の新設時以後、「収納簿」推計による予科生徒の在籍者数は『文部省年報』の記載値と大きく乖離した数値を示した(表五)。第二に、事由別の在籍者と非在籍者の推計を年度別、学部・学科別におこない、その集計を本稿末の付表としてとりまとめた。付表をもとに非在籍者数の年度別の傾向を研究科・本科・予科の所属別に分けて検討した結果、研究科や本科学学生よりも予科生徒が退学や除名となる傾向が顕著にあらわれた(表七)。第三に、「収納簿」にみられる「外国人姓名」の在学者数の推計を年度別、学部・学科別におこなった。『文部省年報』に記載がある、当該年度における立教大学の外国人在籍者数と本推計とは大きく値が異なることを確認し

た。この差異が生まれた要因としては『文部省年報』の当該数値が朝鮮や台湾など日本の旧植民地出身者を含まない値であることが考えられる。なお、この差異を用いて立教大学における当該年度間の在籍者には旧植民地出身者が一定数存在し、それが増加傾向にあったことを指摘した。

最後に課題を挙げると、第一に本稿では取り扱うことができなかった、一九三一年度以降の在籍者数推計を早急に取りまとめるべきであろう。第二に、第四項で論じた非在籍者の下位区分に分類上の課題がある。本稿では、「退学」や「除名」といった就学実績が短期間でも認められるケースと、「不詳その他」に分類したケースのようにまったく就学実績がなかったと推測されるケースとを同じ分類に含めて分析している。本来であれば、学生・生徒の月別の就学実績を念頭に置いた指標を用いて両者を弁別して論じる必要があったが、データ処理時の作業量が膨大となることから、ケースを分けて論じることができなかった。今後の課題としたい。

注

(1) 経理課所蔵の当該資料は時期により資料名に変遷があるが、本稿では「収納簿」と呼称する。

(2) 本稿が利用した一九二二年度から一九三〇年度までの『文部省年

報』は以下の通りである。『日本帝国文部省第五十一年報 自大正十二年四月至大正十三年三月』（上巻、文部大臣官房文書課、一九二七年、二三三～二四九頁）、『日本帝国文部省第五十二年報 自大正十三年四月至大正十四年三月』（上巻、文部大臣官房文書課、一九二八年、二三四～二五三頁）、『日本帝国文部省五十三年報 自大正十四年四月至大正十五年三月』（上巻、文部大臣官房文書課、一九二九年、二二三～二五二頁）、『日本帝国文部省五十四年報 自大正十五年四月至昭和二年三月』（上巻、文部大臣官房文書課、一九三〇年、二三八～二六〇頁）、『日本帝国文部省五十五年報 自昭和二年四月至昭和三年三月』（上巻、文部大臣官房文書課、一九三一年、二四三～二六七頁）、『日本帝国文部省五十六年報 自昭和三年四月至昭和四年三月』（上巻、文部大臣官房文書課、一九三二年、二五八～二八六頁）、『日本帝国文部省五十七年報 自昭和四年四月至昭和五年三月』（上巻、文部大臣官房文書課、一九三三年、二八〇～三二二頁）、『日本帝国文部省五十八年報 自昭和五年四月至昭和六年三月』（上巻、文部大臣官房文書課、一九三六年、二八八～三二二頁）。以下、資料名を挙げる場合は『文部省年報』と略称する。

- (3) 立教学院百年史編纂委員会編『立教学院百年史』（立教学院、一九七四年）三三七頁、立教学院史資料センター編『立教大学の歴史』（立教大学、二〇〇七年）、八三頁。

- (4) 立教大学百二十五年史編纂委員会編『立教学院百二十五年史』（資料編第三巻、立教大学、一九九九年）、一七〇～一七八頁。

(5) 今回、年度を限定した検討にとどまった第一の理由は一九三一年度より資料の記載方式が変わり、前年度までと連続したデータが取得しづらいためである。第二の理由は、一九三一年度の財団法人立教学院の成立を機に、「収納簿」に限らず在学者数推計に関する学内資料が

利用できるようになるためである。

- (6) 選科生とは、立教大学学則に記載がある聴講生制度により在籍した生徒である。一九二二年二月の「進達願」所載の「学則」第七章に「傾聴生」に関する規定があり（『立教大学百二十五年史』資料編第三巻、立教大学、一九九九年、四一頁）、後年の「学則」にもおおよそ同内容の文言で第七章に「選科生」の項目が設けられている（立教大学「大正拾参年 学則」、三二頁以下）。旧制立教大学の選科生は「各学部ニ於テ所定ノ科目中其ノ一科目又ハ教科目ヲ選擇シテ出願スル者アルトキハ設備ニ余裕アル場合ニ限り選科生トシテ聴講ヲ許スコトルベシ」（学則第六十九条）とされ、その入学者数には制限があったが、「選科生ノ許可ヲ得タル者ハ正科学生同様ノ手續ヲナスベシ」（同第七十一条）、「選科生ハ正科生ト同額ノ授業料ヲ納ムベシ」（同第七十二条）と規定があるように正科の学部生と同様の授業を受け同額の学費を負担していた。ただし、選科を卒業しても学士号を称することはできなかった。他大学の事例だが、選科生制度については以下の研究を参照されたい。山本美穂子「北海道帝国大学農学部を選科制度について」（『北海道大学文書館年報』第四号、二〇〇九年三月）。

- (7) 「収納簿」の欄外に書き込まれた関連情報としては、たとえば、学費滞納に伴って連絡が必要となった保証人の姓名や、記載者姓名に「京都」、「東京」などと記載のある側注が確認できる。この側注は学生・生徒自身やその家族の所属教区を示すと考えられるが、確認は得られなかった。

(8) 「収納簿」の貼付紙片は、「各教授出講日割」（「収納簿」一九二四年度所収、欠損あり）、「立教大学商学部三年 学費領収証」（個人名記載、「収納簿」一九二四年度所収）、「大正拾参年第六月分賄料未取者調届」（立教大学賄所東條誠より立教大学事務所宛文書、「収納簿」一

九二四年度所収)、「大正拾四年第三分賄料及じ臨時品代未収者調
届(立教大学賄所風間榮次より立教大学事務所宛文書、「収納簿」一
九二四年度所収)、「舎生室割」(昭和二年九月現在、「収納簿」一九二
七年度所収)、学費納入の猶予に関するメモ書き(学生より天野賢一
宛、昭和参年五月三日付、「収納簿」一九二九年度所収)などである。
(9) 「収納簿」に記載された姓名のなかには、単なるメモ書きと思われ
るものも含まれている。これについては、本稿ではデータとして採録
しなかった。

(10) 『文部省年報』による立教大学在籍者推計は前述したとおり『立教
学院百年史』(三三七頁)に掲載されているが、「大学院」(研究科)
の数値を「総計」に含めておらず、一九二九年度の文学部の小計が各
学科の合計数と一致しないなど瑕疵が見られるため、本稿では『文部
省年報』記載の数値をもとに再集計した。

(11) 前掲、『文部省年報』一九三三年度上巻、二四一頁。

(12) 「学則改正認可申請書」(一九三〇年二月二日)の別紙三「昭和五
年度予算」(文部省専門学務局「立教大学学則中変更認可」一九三〇
年四月三〇日)、国立公文書館所蔵大臣官房総務課記録班分類文書
(旧分類文書、第二 教育門わー(学則、規則)の「学則、規則に関
する許認可文書・大学」に所収。請求番号：昭47文部0012100。な
お、同文書では、一九三〇年度の予算書において、学部(の)学生定員は
六〇〇人であるが、現在数は五〇〇人と表記している。

(13) 「学則」記載の第二十三条は左の通り(「/」は改行を示す)。

「第廿三条 左ノ各項ノ一ニ該当スルモノハ学籍ヨリ除名ス/一、
学業劣等若クハ疾病ニヨリ成業ノ見込ナキ者/二、出席常ナラサ
ル者/三、何等ノ事故ヲ以テスルニ拘ハラシ引続キ一ケ年間欠席
シ又ハ正当ノ事由ナクシテ一ケ月以上欠席シタル者/四、在学六

年ヲ越ヘ尚卒業セサル者」(前掲、『立教大学百二十五年史』資料
編第三巻、三七―三八頁より引用)。

(14) 前述したとおり、「外国人姓名」とそれ以外姓名の弁別は筆者の恣
意的な基準によるため、本稿が試みた立教大学における外国人留學生
数推計や出身地域の推定には一定の限界がある。また、「収納簿」に
みられる漢字表記の「外国人姓名」の立教大学在籍者がただちに日本
の旧植民地である朝鮮や台湾や、中華民国に限定される訳ではなく、
華人の居住地である東南アジアやその他の地域の可能性もあるため、
ここでは同在籍者の出身地を「漢字文化圏」であったと指摘することに
留めた。当該年度の立教大学に在籍した留學生の出身地に関しては、
稿を改めて論じたい。

〔謝辞〕 本稿の作成にあたって奈須恵子氏と宮本正明氏から適切なご助
言を頂きました。ここに感謝の意を表します。

表一〇（一） 年度別事由別立教大学在籍者数・記載者数推計（1923年度）

（単位：人）

学部・学科・学年		事由別記載者内訳										記載者合計 (在学者小計+ 非在学者小計)
		事由別在学者内訳				非在学者小計						
学部学科	学年	なし	休学	在学その他	在学者小計	退学	除名	除籍	死亡	不詳その他	非在学者小計	
(I) 研究科												
商学本科	1	86	4	2	92	4	6		1	2	13	105
	2	82	5	4	91	1	5			1	7	98
	3	52			52		1				1	53
(A) 商学部本科計		220	9	6	235	5	12	0	1	3	21	256
文学本科	1	24	1		25	1	1		1		3	28
	2	21	1		22						0	22
	3	6			6					1	1	7
(B) 文学部本科計		51	2	0	53	1	1	0	1	1	4	57
(II) 本科計 (A+B)												
商科予科	1	122	2	4	128	8	16			3	27	155
	2	106	7		113	9	9		1	2	21	134
(C) 商科予科計		228	9	4	241	17	25	0	1	5	48	289
文科予科	1	34	1		35	1	13			3	17	52
	2	20			20	4	4				8	28
(D) 文科予科計		54	1	0	55	5	17	0	0	3	25	80
(III) 予科計 (C+D)												
本科予科合計 (II)+(III)		553	21	10	584	28	55	0	3	12	98	682
合計 (I)+(II)+(III)		553	21	10	584	28	55	0	3	12	98	682

出典：立教大学「収納簿」1923年度より作成。

注：1) 選科学生は学部生の欄に含む。

2) 各年度の資料には誤記や重複が見られるが、それは除外した。

3) 在籍者、非在籍者、記載者の定義や事由分類については本文の(2)集計処理方法の項を参照されたい。

4) 空欄は原資料に当該項目の記載がないことを示す。

表一〇（二） 年度別事由別立教大学在籍者数・記載者数推計（1924年度）

（単位：人）

学部・学科・学年		事由別記載者内訳										記載者合計 (在学者小計+ 非在学者小計)
		事由別在学者内訳			在学者小計	事由別非在学者内訳					非在学者小計	
学部学科	学年	なし	休学	在学その他		退学	除名	除籍	死亡	不詳その他		非在学者小計
(I) 研究科												
商学本科	1	96	4	10	110	1	2		2		5	115
	2	84	2	3	89		2			1	3	92
	3	91	1	3	95						0	95
(A) 商学部本科計		271	7	16	294	1	4	0	2	1	8	302
文学本科	1	18	1	1	20	2			1		3	23
	2	22		2	24						0	24
	3	19		5	24				1	1	2	26
(B) 文学部本科計		59	1	8	68	2	0	0	2	1	5	73
(II) 本科計 (A+B)		330	8	24	362	3	4	0	4	2	13	375
商科予科	1	113	3	2	118	9		8		10	27	145
	2	118	3	2	123	4	2		2	2	10	133
(C) 商科予科計		231	6	4	241	13	2	8	2	12	37	278
文科予科	1	35	2	1	38	8				2	10	48
	2	36	1	2	39	1	1				2	41
(D) 文科予科計		71	3	3	77	9	1	0	0	2	12	89
(III) 予科計 (C+D)		302	9	7	318	22	3	8	2	14	49	367
本科予科合計 (II)+(III)		632	17	31	680	25	7	8	6	16	62	742
合計 (I)+(II)+(III)		632	17	31	680	25	7	8	6	16	62	742

出典：立教大学「収納簿」1924年度より作成。

注：表一〇（一）と同じ。

表一〇（三） 年度別事由別立教大学在籍者数・記載者数推計（1925年度）

（単位：人）

学部・学科・学年		事由別記載者内訳										記載者合計 (在学者小計+ 非在学者小計)
		事由別在学者内訳				非在学者小計						
学部学科	学年	なし	休学	在学その他	在学者小計	退学	除名	除籍	死亡	不詳その他	非在学者小計	非在学者小計
(I) 研究科		2		4	6						0	6
商学本科	1	108	1	1	110	4				4	8	118
	2	102	3	2	107				1	1	2	109
	3	77		4	81	1			2	5	8	89
(A) 商学部本科計		287	4	7	298	5	0	0	3	10	18	316
文学本科	1	36	3	1	40	2	1			3	6	46
	2	16			16	1			1		2	18
	3	23	1	1	25						0	25
(B) 文学部本科計		75	4	2	81	3	1	0	1	3	8	89
(II) 本科計 (A+B)		362	8	9	379	8	1	0	4	13	26	405
商科予科	1	123	3	2	128	10	10			11	31	159
	2	90	2	1	93	12	12			2	26	119
(C) 商科予科計		213	5	3	221	22	22	0	0	13	57	278
文科予科	1	27		1	28	4	8			1	13	41
	2	31	1		32	2		1		2	5	37
(D) 文科予科計		58	1	1	60	6	8	1	0	3	18	78
(III) 予科計 (C+D)		271	6	4	281	28	30	1	0	16	75	356
本科予科合計 (II)+(III)		633	14	13	660	36	31	1	4	29	101	761
合計 (I)+(II)+(III)		635	14	17	666	36	31	1	4	29	101	767

出典：立教大学「収納簿」1925年度より作成。

注：表一〇（一）と同じ。

表一〇（四） 年度別事由別立教大学在籍者数・記載者数推計（1926年度）

（単位：人）

学部・学科・学年		事由別記載者内訳										記載者合計 (在学者小計+ 非在学者小計)
		事由別在学者内訳				非在学者小計						
学部学科	学年	なし	休学	在学その他	在学者小計	退学	除名	除籍	死亡	不詳その他	非在学者小計	
(I) 研究科		7			7						0	7
商学本科	1	87	1	2	90	2				3	5	95
	2	107	1		108	5	1		1		7	115
	3	103		3	106				1		1	107
(A) 商学部本科計		297	2	5	304	7	1	0	2	3	13	317
文学本科	1	32	5		37	3	1			2	6	43
	2	32	2		34				1		1	35
	3	17			17					1	1	18
(B) 文学部本科計		81	7	0	88	3	1	0	1	3	8	96
(II) 本科計 (A+B)		378	9	5	392	10	2	0	3	6	21	413
商科予科	1	127	4	4	135	3	14			3	20	155
	2	110	3	2	115	6	1	1	1	1	10	125
(C) 商科予科計		237	7	6	250	9	15	1	1	4	30	280
文科予科	1	43	4	3	50	2	5		1	3	11	61
	2	24			24	2	2				4	28
(D) 文科予科計		67	4	3	74	4	7	0	1	3	15	89
(III) 予科計 (C+D)		304	11	9	324	13	22	1	2	7	45	369
本科予科合計 (II)+(III)		682	20	14	716	23	24	1	5	13	66	782
合計 (I)+(II)+(III)		689	20	14	723	23	24	1	5	13	66	789

出典：立教大学「収納簿」1926年度より作成。

注：表一〇（一）と同じ。

表一〇（五） 年度別事由別立教大学在籍者数・記載者数推計（1927年度）

（単位：人）

学部・学科・学年		事由別記載者内訳									記載者合計 (在学者小計+ 非在学者小計)
		事由別在学者内訳			在学者小計	非在学者内訳					
学部学科	学年	なし	休学	在学その他		退学	除名	除籍	死亡	不詳その他	非在学者小計
(I) 研究科		4	1		5	3			1	4	9
商学本科	1	99	3	1	103	4	2			6	109
	2	86	1		87	4	1		1	6	93
	3	105	1		106	1	1	1		3	109
(A) 商学部本科計		290	5	1	296	9	4	0	1	15	311
文学本科	1	22			22	3			1	4	26
	2	31	2		33		1	3		4	37
	3	32			32	1	1		1	3	35
(B) 文学部本科計		85	2	0	87	4	2	3	0	2	98
(II) 本科計 (A+B)		375	7	1	383	13	6	3	1	3	409
商科予科	1	88	5	1	94	6	7		2	35	129
	2	150	7	5	162	23	8		1	33	227
	3	121	8	2	131	7	5			13	144
(C) 商科予科計		359	20	8	387	36	20	0	3	54	500
文科予科	1	24	1	2	27	2	4			10	37
	2	37	4	5	46	4	8			15	73
	3	33		1	34	4	2	1		2	43
(D) 文科予科計		94	5	8	107	10	14	1	0	21	153
(III) 予科計 (C+D)		453	25	16	494	46	34	1	3	75	653
本科予科合計 (II)+(III)		828	32	17	877	59	40	4	4	78	1062
合計 (I)+(II)+(III)		832	33	17	882	62	40	4	4	79	1071

出典：立教大学「収納簿」1927年度より作成。

注：表一〇（一）と同じ。

表一〇（六） 年度別事由別立教大学在籍者数・記載者数推計（1928年度）

（単位：人）

学部・学科・学年		事由別記載者内訳									記載者合計 (在学者小計+ 非在学者小計)	
		事由別在学者内訳				非在学者小計						
学部学科	学年	なし	休学	在学その他	在学者小計	退学	除名	除籍	死亡	不詳その他	非在学者小計	
(I) 研究科		4		2	6	2	1	1			4	10
商学本科	1	122	1	1	124	4	1		1	1	7	131
	2	97			97	2			2		4	101
	3	87	1		88	1	3	1			5	93
(A) 商学部本科計		306	2	1	309	7	4	1	3	1	16	325
文学本科	1	33	1		34	2		2	1		5	39
	2	22			22	1	2				3	25
	3	32	2		34		3			1	4	38
(B) 文学部本科計		87	3	0	90	3	5	2	1	1	12	102
(II) 本科計 (A+B)		393	5	1	399	10	9	3	4	2	28	427
商科予科	1	182	2		184	19	19	5		46	89	273
	2	159	4		163	6	9	8		44	67	230
	3	136	6		142	3	11	1			15	157
(C) 商科予科計		477	12	0	489	28	39	14	0	90	171	660
文科予科	1	90	4		94	13	8	4		36	61	155
	2	49	2	2	53	7	5	4	1	15	32	85
	3	37	2		39	6		1			7	46
(D) 文科予科計		176	8	2	186	26	13	9	1	51	100	286
(III) 予科計 (C+D)		653	20	2	675	54	52	23	1	141	271	946
本科予科合計 (II)+(III)		1046	25	3	1074	64	61	26	5	143	299	1373
合計 (I)+(II)+(III)		1050	25	5	1080	66	62	27	5	143	303	1383

出典：立教大学「収納簿」1928年度より作成。

注：表一〇（一）と同じ。

表一〇（七） 年度別事由別立教大学在籍者数・記載者数推計（1929年度）

（単位：人）

学部・学科・学年		事由別記載者内訳									記載者合計 (在学者小計+ 非在学者小計)	
		事由別在学者内訳			在学者小計	事由別非在学者内訳						非在学者小計
学部学科	学年	なし	休学	在学その他		退学	除名	除籍	死亡	不詳その他	非在学者小計	
(I) 研究科		2			2					0	2	
商学本科	1	134	1		135	10	2		2	14	149	
	2	120			120	1	1	1	1	4	124	
	3	95			95			2	2	4	99	
(A) 商学部本科計		349	1	0	350	11	3	3	0	5	22	372
文学本科	1	42			42	12		3		3	18	61
	2	28	1		29	3		2		1	6	35
	3	24			24				1	1	24	
(B) 文学部本科計		94	1	0	95	15	0	5	0	5	25	120
(II) 本科計 (A+B)		443	2	0	445	26	3	8	0	10	47	492
商科予科	1	192	14		206	13	11	9		1	34	240
	2	183	12	2	197	12	4	4	5		25	222
	3	151	2		153	9	3	4		3	19	172
(C) 商科予科計		526	28	2	556	34	18	17	5	4	78	634
文科予科	1	77	12		89	12	11	9		1	33	122
	2	89	2		91	4	2	5		1	12	103
	3	44	3		47	5		2			7	54
(D) 文科予科計		210	17	0	227	21	13	16	0	2	52	279
(III) 予科計 (C+D)		736	45	2	783	55	31	33	5	6	130	913
本科予科合計 (II)+(III)		1179	47	2	1228	81	34	41	5	16	177	1405
合計 (I)+(II)+(III)		1181	47	2	1230	81	34	41	5	16	177	1407

出典：立教大学「収納簿」1929年度より作成。

注：表一〇（一）と同じ。

表一〇（八） 年度別事由別立教大学在籍者数・記載者数推計（1930年度）

（単位：人）

学部・学科・学年		事由別記載者内訳										記載者合計 (在学者小計+ 非在学者小計)
		事由別在学者内訳				非在学者小計						
学部学科	学年	なし	休学	在学その他	在学者小計	退学	除名	除籍	死亡	不詳その他	非在学者小計	
(I) 研究科		3		1	4						0	4
商学本科	1	150	1		151	12	1			1	14	165
	2	126	1		127	3	3	1		1	8	135
	3	115	2	1	118		1	2	1	4	8	126
(A) 商学部本科計		391	4	1	396	15	5	3	1	6	30	426
文学本科	1	45	1		46	3	1	1		1	6	52
	2	36	1		37	5	1	2		1	9	46
	3	29	1		30			1	1	1	3	33
(B) 文学部本科計		110	3	0	113	8	2	4	1	3	18	131
(II) 本科計 (A+B)		501	7	1	509	23	7	7	2	9	48	557
商科予科	1	149	9	4	162	8	10	6		4	28	190
	2	182	17		199	13	4	3	1	3	24	223
	3	200	8		208	7		2		4	13	221
(C) 商科予科計		531	34	4	569	28	14	11	1	11	65	634
文科予科	1	85	4		89	5	1	2	1	6	15	104
	2	63	7		70	11	4	5		3	23	93
	3	67	3		70	4	2	1		1	8	78
(D) 文科予科計		215	14	0	229	20	7	8	1	10	46	275
(III) 予科計 (C+D)		746	48	4	798	48	21	19	2	21	111	909
本科予科合計 (II)+(III)		1247	55	5	1307	71	28	26	4	30	159	1466
合計 (I)+(II)+(III)		1250	55	6	1311	71	28	26	4	30	159	1470

出典：立教大学「収納簿」1930年度より作成。

注：表一〇（一）と同じ。